２０２５年度　岐阜協立大学
学内ゼミナール大会　参加論文

ゼミ名：古田ゼミ

テーマ：地域スポーツ事業における経営的課題の分析

参加者：　経営学部スポーツ経営学科　永田太志（2230724）
前島志音（2230871）

目次

1　研究目的 **2**

2　研究方法 2

3　活動内容 2

4　研究結果と考察 4

1. 研究目的

本研究の目的は、これまで地域スポーツ事業への参画経験を持たない学生が、実際に事業運営に携わる過程で得た気づきや考察を明らかにし、次世代の地域スポーツ事業における学生参画の在り方に資する知見を得ることである。ここでいう「参画」とは、単なるボランティア活動への参加にとどまらず、各回のプログラム企画や運営支援（指導）を学生自身が主体的に担うことを指す。

本演習では、2017 年以降、地域実教育（PBL）の一環として、NPO 法人大垣市レクリエーション協会が主催する地域スポーツ事業「健康スポレクひろば」に運営スタッフとして参画してきた。2022 年から 2024 年にかけて開催された本ゼミナール大会においては、参加者増加策、運営体制、実施プログラムの開発等について報告を行ってきた。

本年度は、運営方法の見直しとして、従来の「一斉指導方式」を中心としたプログラム構成から転換し、「自由選択活動」の時間を増加させる試みを行った。この変更により、参加者が自身の身体状況や目的に応じて適切な活動を選択できる環境を整えるとともに、主体的に運動へ取り組む姿勢を促し、楽しみながら健康づくりを継続できる場の創出を目指した。また、新規参加者にとっても参加しやすい環境づくりに取り組んだ。

地域スポーツ事業「健康スポレクひろば」は、学生と高齢者が交流しながら、心身の健康増進および地域内のつながりを深めることを目的とした取り組みである。高齢者にとって、学生との会話や交流は、「社会とつながっている」という実感を得る機会となり、孤独感の軽減や精神的安定に寄与する。また、学生との交流やレクリエーション活動は脳への刺激となり、認知症予防や介護予防への効果も期待される。さらに、軽運動を通じた筋力維持や健康増進、継続的な社会参加の習慣化は、心身の健康を支える重要な要素である。

一方、学生にとっても、高齢者との世代間交流を通じて相互理解が深まり、地域社会とのつながりを実感する貴重な学習機会となる。楽しさを共有する中で、福祉や介護への理解が促進されるとともに、社会性や責任感の醸成が期待される。本事業は、世代を超えた交流を基盤とし、地域全体が支え合いながら共に成長していくための重要な役割を担っている。

2. 研究方法

本研究では、「健康スポレクひろば」への参画意思を示した学生が実際に事業運営に携わり、その過程を対象として調査を行った。対象者は、第 32 回に 2 名、第 33 回に 3 名、第 34 回に 3 名の計 8 名（延べ人数）である。学生は運営スタッフとして活動しながら、事業運営や参加者との関わりを通じて得た気づきや課題について記録・整理を行った。

3. 活動内容

従来の「健康スポレクひろば」では、全参加者が同一の活動を行う「一斉指導方式」を中心としたプログラムが実施されていた。しかし、参加者間の身体能力差により活動の進行が円滑に行われない場面や、指導者を介した間接的なコミュニケーションが多く、参加者同士の主体的な交流が十分に生まれにくいという課題が見受けられた。

これらの課題を踏まえ、本年度は複数の活動を参加者が自由に選択できる「自由選択活動」の時間を新たに設けた。この形式では、参加者が各自のタイミングで活動を開始し、終了や次の活動への移行も自由に行うことができる。主な活動内容は、「卓球」「マグダーツ」「囲碁ボール」「将棋」「マンカラ」などであり、運動要素と認知的要素を併せ持つプログラム構成とした。

この取り組みにより、参加者一人ひとりの身体状況や興味に応じた活動参加が可能となり、より主体的で交流を促す環境づくりを目指した。

（活動の流れ：　準備体操　→　一斉運動　→　自由選択　→　片付け　）

- **卓球**

  2 人（シングルス）または 2 組（ダブルス）が、ネットを張った専用の卓球台を挟んで、ラケットでプラスチック製のボール（直径 40㎜）を打ち合う競技です。11 点先取で 3〜4 ゲームを先取した方が勝ちとなる形式が一般的です。回転（スピン）やスピードを駆使する激しい頭脳戦である一方、年齢や体格差に左右されにくく、誰でも気軽に楽しめるスポーツです。

- **マグダーツ**
  磁石（マグネット）でくっつく安全なダーツで、針の代わりに磁石が付いた矢を投げ、壁掛け式の的（ボード）に当てて得点を競うレクリエーションスポーツです。安全性が高く、コンパクトに持ち運び・設置できるため、子どもから高齢者まで室内やちょっとしたスペースで手軽に楽しめ、リハビリなどにも活用されています。

- **囲碁ボール**
  ゲートボールと五目並べを組み合わせたニュースポーツです。2m×5m の専用マット上で白黒各 10 個のボールをスティックで打ち、縦・横・斜めに３個並べるゲームです。

- **ゲームレール**
  主に高齢者施設やレクリエーションで親しまれている、細長いレール上にボールを転がし、止まった場所のトランプ（点数）を競う運任せのゲームです。

- **卓上カーリング**
  氷上のチェスと呼ばれる「カーリング」を、テーブルや平らな床の上で手軽に楽しめるようにしたゲームです。ストーン（石）の代わりに、車輪付きの小さなディスクや磁石のついたポーンを滑らせて、中心の円（ハウス）を狙うレクリエーションです。

- **将棋**
  9×9 の盤上で 2 人の対局者が交互に計 40 枚の駒を動かし、相手の玉将（王様）を先に追い詰める（詰ます）日本の伝統的なボードゲームです

- **マンカラ**
  アフリカや中近東、東南アジアで古くから親しまれている、紀元前まで歴史が遡る世界最古のボードゲームの一群。基本は 2 人で、盤上のポケット（穴）の石を交互に移動させて、「種まき」のように分配し、自分のストアに多くの石を集めた方が勝つ「先読み」と「駆け引き」の知育ボードゲーム。

写真左　学生の自己紹介　写真右協会スタッフと紐トレーニング打ち合わせ

写真左下　マグダーツ　写真右下　マンカラ　いずれも自由選択種目
学生も加わり一緒に活動する

4. 研究結果と考察

A) 企画・指導から分かったこと

専門知識の獲得を通じて、高齢者の身体機能は学生世代とは大きく異なることを認識するに至った。これにより、指導にあたっては安全性を最優先とし、ケガのリスクを最小限に抑えた運動内容や声かけを行う必要性を理解した。また、参加者の意欲を高めるためには、活動内容そのものだけでなく、導入段階における工夫や「つかみ」の重要性についても学びを得た。

特に、参加者が「運動している」という意識を過度に持たず、楽しみながら自然と身体を動かしている状況を意図的につくり出すことに難しさを感じ、その実践の困難さを実感した。

さらに、将棋などの文化的要素を含む種目に関しては、ルールや進行方法を十分に理解していない学生が多く見られた。一方で、当該種目に理解のある学生が積極的に関与することで、活動が円滑に進行し、参加者の満足度や継続的な参加につながることが示唆された。

B) 内部課題・自由選択活動の課題

自由選択活動の導入にあたり、指導場面において活動内容の説明が難しい場面が多く見受けられた。説明の理解度は、その後の活動の質や参加者の主体的な取り組みに大きく影響することから、今後は説明内容の段階的な提示や、実演・図示など視覚的に動きを確認できる手法を取り入れるなど、指導方法のさらなる改善が求められる。

一方で、自由選択活動の導入により、参加者の主体性が向上し、参加者同士が自発的にコミュニケーションを取り、新たな小規模コミュニティが形成されるなど、活動は全体として良好な方向へ進展していると評価できる。これらの成果を踏まえ、自由選択活動は今後も継続して実施する方針とした。

また、身体的な制約を有する参加者や負傷中の参加者であっても参加可能となるよう、活動量の少ない種目や、将棋・マンカラといった文化的要素を含む種目の導入は不可欠であったと考えられる。

しかしその一方で、自由度の高さが影響し、一部の参加者において特定の種目のみを継続的に選択する傾向が見られた。その結果、特定種目の占有状態が生じ、他の種目への参加者の分散がうまく図れない場面も確認された。今後は、活動ローテーションの提案や時間帯ごとの推奨種目の設定などを検討し、参加者が多様な活動に触れられる環境を整えることが、より質の高い活動空間の創出と事業目的の達成につながると考えられる。

C) 外部課題

本事業は、毎回 10 数名程度の参加者を得ているものの、参加者構成には偏りが見られる。具体的には、参加者の約 8～9 割がリピーターであり、ねんりんピックの影響により一時的に新規参加者の増加は見られたものの、その多くは既存参加者の知人による参加であった。

また、参加者の多くはスポーツへの関心や健康意識が比較的高い、いわゆるアクティブ層であり、運動習慣の少ない層への十分なアプローチには至っていない。この点は、本事業が地域全体の健康づくりに寄与するうえで、今後の重要な課題である。

そのため、今後は新規参加者の獲得を目的とした広報活動を強化する必要がある。対象者の年齢層を踏まえると、インターネットを中心とした広報よりも、スーパーや高齢者が日常的に利用する施設、商店街、自治会の回覧板などを活用したアナログな告知手法が有効であると考えられる。さらに、開催場所を変更した出張型の活動を実施することで、徒歩圏内に居住する新たな参加者層を獲得できる可能性も示唆される。

以上のことから、本年度の取り組みにより、参加者の活動意欲は大きく向上し、事業のさらなる発展につながる成果が得られたと考えられる。一方で、自由選択活動の運営方法や参加者構成の偏りなど、新たな課題も明らかとなった。今後は、これらの課

題を次年度以降の取り組みに反映させることで、地域への貢献および参加者の継続的な健康づくりをより一層推進していく必要がある。